

社会批評との関係から見たグローバルな 「腐女子」漫画文化—その可能性と限界

ジェシカ・バウエンス＝杉本

政治運動を成功させるためには、女性の抑圧を分析するところで留まっては
いけず、女性の快楽を起動させるのも忘れてはいけない¹。(レンツ 1993: 398)

はじめに

近年、日本の腐女子文化、特に腐女子漫画（ボーイズラブ＝BL 漫画）は、あらゆる形で海外に広まっている。正式に認可、翻訳、出版されるものもあるが、その多くはファンによる非公式な（違法ともいえる）ルートで流通している。海賊版や非公式な流通の背景に潜む動機はさまざまで、こうした状況はジャンル全体に害を及ぼすこともあるが、意外に利点もある。その利点とは、このジャンルの拡散である。また、正式なルートで発信されるものでさえ、奇妙な道りを辿る BL 漫画も稀ではない。2010 年発行の英語論集『Boys' Love Manga』の序文において、編集者のアントニア・レヴィ（Antonia Levi）は、1994 年にアメリカで公開された、こだか和麻の『KIZUNA』のアニメ版はゲイ男性の視聴者向けとして配給されたと述べている（2010: 3）。BL の作品が男性のオーディエンスに配給されることのどこが奇妙かというと、BL 漫画はかなり独特なジャンルで、基本的な定義は「女性が女性向けに描く男同士の恋愛・性愛」であり、男性読者

1 “It is important to remember that the success of a political movement depends not only on analyzing women's oppression but also on mobilizing women's pleasure.”（筆者訳）

も多数いるものの、業界、そしてファンコミュニティー全体では女性作家と女性の読者の需要供給で成り立っているからである。

日本と東アジア諸国の女性だけでなく、もっと遠く離れた異なる文化的、社会的背景を持つ世界中の女性が、このBL漫画、そしてBLジャンル全体を支持している。アメリカのカリフォルニアでは、2001年から毎年「Yaoicon」（ヤオイ・コンヴェンション）が開催され、2012年には12回目を迎えた²。日本に続いて、世界で2番目に日本の漫画を消費するフランスでも、2011年に最初の「Yaoi yuri con」（ヤオイ・ユリ³・コンヴェンション）が開催された。

同様に、近年ではBL研究も国内外で盛んになってきている。日本以外の学者が言語の壁と戦いながら、日本のBL漫画と腐女子文化に興味を示しつつある一方で、日本国内の学者の多くは、BL漫画や腐女子文化を「日本限定」としてしか扱わず、海外での広まり、及び比較文化的な面を軽視し続けている。そういった現状を本章で考察した後、そもそも何故、BL漫画や腐女子文化をグローバルな現象として扱うべきなのか、BLと腐女子コミュニティーの今後の研究にどのような可能性が期待できるのか、また、どういった限界が存在するのか、そしてBL漫画と腐女子文化研究、社会批評の関係について論じたいと思う。

1. 問題提起と本章の構成

BLとは boys' love⁴ というジャンル名の略称で、男性同士の恋愛・性愛

2 日本のコミケットとは形式が少し異なる。Yaoiconの魅力は、ヴォランティアスタッフの一部が美少年であったり、販売されるグッズも日本では目にしないようなものがあつたりするところである。アメリカの腐女子は、「攻め」「受け」「愛♡やおい」等が漢字で記されているTシャツやトートバッグを身につけたり、全体的に日本のファンの集いより騒々しい雰囲気会場にある。

3 「ユリ」もまたヤオイと同様、同性愛をテーマとするジャンルで、主人公は少女もしくは大人の女性であるが、作家・読者は女性、男性の両方がいる。ヤオイよりマイナーなジャンルだが、ヤオイより作家・読者層に多様性があるといえる。

4 英語の boys' love は「少年愛」という言葉の略である。この「少年愛」は1970年代、少女マンガのサブジャンルとして浮上し、現代のBLの起源となった。少年愛を描いていたのは、竹宮恵子や萩尾望都等、今や生きる伝説となった「花の24年組」のメンバーである。しかし、「少年愛」という語がとても幼い10代かそれ以下の男の子を連想させるので、主人公の年齢が高校生から40代までと幅広くなった現在は、「BL」がジャンル名として好まれるようになっていく。逆に、英語圏では、「boys' love」というジャンル名は子供に対する性犯罪を連想させるため、BLという言葉は知られているが、ジャンル全体を「yaoi」と呼ぶファンが多い。

を意味する。また女性向けの漫画と文学の一ジャンルでもあり、アニメやゲームなど様々な媒体で制作されている。しかし、その多様な広がりにもかかわらず、BLに興味のない一般人（特に男性）からは「不可視」なものだとされる現象も見受けられる。

10年前と比べて可視化が進んでいるにもかかわらず、BLの研究者が「正統派の学者」として認められるのは、まだまだ難しい状況である。漫画研究そのものがまだ一部の学術現場で認められていないうえ、BLは「女性特有」なジャンルであるという要素も絡まって、BLを学術的に論議する状況にはなっていない。この状況を改善しようとする試みの一つとして、「大阪腐女子研究会」の第1回シンポジウム(2010年)が開催された(東2012: 177)。ここ数年、一般向け雑誌の『女性セブン』や『ダ・ヴィンチ』等が「BL特集」を組むことで、BL漫画、そしてジャンルの可視化が進んでいるが、その可視化によって新たな波紋を呼んでいる。京都精華大学マンガ学部教授であり、著名な漫画家でもある竹宮恵子氏が2011年の基調報告で、1970年代、世間は同性愛というものに馴染みがなかったため、こういった漫画に対しての規制も存在しなかったが、可視化によって、現在は東京の「青少年健全育成条例」の規制対象になっていると述べた(2011: 5-6)。国内外で「花の24年組」のメンバー、そして「BLのゴスマザー」の1人として知られている竹宮にとって、BL漫画がこういった表現規制の危機に晒されることは勿論他人ごとではない。

BL漫画と腐女子文化を否定する男性は国内外にいるが、これはジャンルを十分に理解していない人の「典型的」な態度だといえる。先述したように、漫画研究全体においても、その傾向が未だに見られる。2009年12月、京都国際マンガミュージアムの第1回国際学術会議「世界のコミックスとコミックスの世界——グローバルなマンガ研究の可能性を開くために」⁵において、フランスのBD学者のティエリー・グルンステンも、BLジャンルとは日本限定のものであるため、比較研究の対象になるほど重要なものではないと暗示する発言をした。

しかし、海外で、特に英語圏やグルンステンの出身であるフランス語圏では、日本製のBL漫画が人気であるだけでなく、日本と同様、1970年代から「女性が女性向けに描く男同士の恋愛・性愛」というジャンルが主

5 <http://imrc.jp/lecture/2009/12/comics-in-the-world.html> を参照。

に SF ファンの間で広まっていた。そのジャンルは「スラッシュ」と呼ばれるが、漫画と違って、コミックスよりはるかにテキストが多く、つまりは小説であった。「スラッシュ」という名称は、実はカップリングの間に入る記号に由来し、初期のスラッシュジャンルは、日本と同様、SFジャンルのファンから発信された。とりわけ『スタートレック』シリーズのカーク艦長とミスター・スポックのカップリングは「K/S」と称され、頭文字の間の記号の「/」がそのジャンル名となったのである⁶。そして、このジャンルは海外の男性中心主義的な学術世界においては不可視でも、日本の SF 評論家や BL 研究者にはよく知られている。SF 評論家の小谷真理は 2004 年、『エイリアン・ベッドフェロウズ』というエッセイ集において、丸々 1 章を K/S フィクションに費やした (86-101)。言語と文化的背景が違って、また主な媒体に明らかな差異が認められても、スラッシュというジャンルもまた「女性が女性向けに書く男同士の恋愛・性愛」である。「日本以外こういった現象は存在しない」というのは、女性作家や読者、そして女性文化全体を認識していない、とんでもない誤解である。

本稿はこの「誤解」を解こうとする試みでもある。まず、従来の研究でみられる BL と腐女子文化言説とは何かを述べながら、その言説の問題点を指摘し、問題の解決案をいくつか提示していきたい。その後、グローバルな BL 漫画と腐女子文化研究、そして社会評論の関係について述べていくこととする。

2. BL 漫画・腐女子研究の現状

腐女子研究では、まず BL のジャンルについての「定義」が必ず議論される。「少年愛」「ヤオイ」「ボーイズラブ」、これら 3 つの言葉を互換的に使う研究者もいれば、この 3 つは別ものだと主張する研究者もあり、定義についての討論が未だにしばしば起こっている。「少年愛」(そして「耽美」)

6 「スラッシュ」という名称は「スラッシャー映画」に由来し、グロテスクなホラー映画のことを指す場合もある。1970 年代から英語圏において「スラッシャー」(腐女子に妥当する用語)という語はあったが、インターネットが普及してから、「スラッシュ」と「BL」、そして「やおい」が混同されるようになり、英語で小説を書いている、その作品を「ヤオイ」と称するファンが多い。その上、英語圏でも、子供の時から日本のマンガを読んでいるファンは、「スラッシュ」よりも先に日本のヤオイ、もしくは英語でヤオイと称する作品と出会うため、ローカルなスラッシュ文化の存在・歴史を認識していない場合もある。

「ヤオイ」「BL」の間に流動的傾向は確かに存在し、「ヤオイ」同人誌を描くアーティストがプロとしてBL作品を描くこともある。ひとまず本章では、「BL漫画」は商業的でオリジナルな作品を指し、二次創作は同人誌か「ヤオイ漫画」を、そして「少年愛」は1970年代の「初期のBL」や耽美作品を指すことにする。

また、未だに議論されているのは、作者と読者の「動機」についてである。BLジャンルを知らない人が、その内容を「男性同士の性愛」と聞けば、この手の趣味は「普通の感覚の女性」のものではないと断じてしまう。では何故、腐女子がBLを制作・消費するのかについては、これまで様々な学者や評論家によって分析されてきた。しかしそれは、腐女子文化の「説明」というより、「弁明」が学者によってなされていて、まるで腐女子が悪いことであるかのように、彼女達の趣味が説明されている。つまり、ジャンル全体のレーゾンデートルがオーディエンスの心理状態にあるとい前提が働いていた。

例えば、まずジェンダー・スタディーズの視点において、よく見られる精神分析的な洞察としては、腐女子の動機はある意味「病的」だという解釈がある。「心理的に健全ではない」と思わせる発言は青山智子(1988)、鈴木和子(1998)、中島梓(1987、1991、1998)、藤本由香里(1998)や大城房美(2001)等の論点にみられる。そこではBL漫画の魅力は、「現実逃避」や(女性としての)ジェンダーパフォーマンス回避等にあるとされる。

しかし、漫画全体を研究する学者が主張するように、漫画そのものが読者の現実逃避の手段である(ベルント1992: 107)。小説や競馬他のポピュラーカルチャーエンターテインメントと同様、現実逃避するための手段であることは当然で、BL漫画はそういった面で特別でもなければ、女子だから現実逃避してはいけないということにもならないはずだ。また、腐女子はとにかく性的アイデンティティに不満を抱き、男性性にあこがれているという主張も頻繁にみられる。数年前、大学において著名な男性学者がヤオイとオタク研究のメーリングリストにメッセージを流し、「腐女子は胸の大きい人が多い。セクハラにあうから被害妄想をいだき、現実逃避をしたくなる」という奇妙な個人理論を展開していた。彼の性差別的で非学術的な発言はすぐさま同メーリングリストの参加者から反論の嵐にあったが、女性特有のエンターテインメントジャンルは女性が対象だからこそ、

病理化しかねないというリスクは常にある。

こうした自らの女性性に消極的で、暗いとみなされている腐女子の動機の捉え方に対して、もっとフェアに積極的な意見を述べる学者が現れた。このような学者の多くは腐女子であるとともに、腐女子文化を研究するという、インサイダーの視点から出発し、こういった趣向は病理的ではないということを前提に様々な側面から研究を進めている。

西村マリもその1人である。2002年、西村は『アニパロとヤオイ』を出版したが、彼女も心理学に興味があるものの、必ずしも腐女子は精神的に病んでいると主張する訳ではない。また、西村が展開する言説は、1991年発行、ジャニース・ラドウェイ (Janice A. Radway) の『ロマンスを読む：女性、家父長制、ポピュラー文学』(*Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*) と共通点が多いことも興味深い。長池一美は、2007年、BL漫画に登場するアラブ系キャラクターの他者化を分析し、BL漫画においての人種問題と日本社会全体におけるポスト植民地主義に触れながら、BLはジェンダーのコードを解きやすくする手段であると主張している。堀あきこは、2009年『欲望のコードーマンガにみるセクシュアリティの男女差』で、男性向け漫画、女性向け漫画、そしてBL漫画の「欲望のコード」、性描写のなかのエンコーディングを分析している。

溝口彰子と東園子は腐女子同士の繋がりがあり、女性のホモソーシャル、そしてホモセクシュアルのコミュニティの側面に注目する。溝口(2010)によると、BL漫画の同性愛のコンテンツについて熱く語り合う腐女子は「ヴァーチャル・レズビアン」であり、腐女子同士間では腐女子ではない女性にはみられない深い関係性が生まれ、この関係は[世間に容認される]ホモソーシャルな関係を越境する。溝口自身は、BLを読むことによって、自らのアイデンティティに気がついたとも述べている。こういった「当事者」の証言は学術現場では珍しいものの、国内外を問わず、溝口と同様な経験をしたと語るBLファンが多く、そういった現象を可視化することはとても有意義であるといえる。そして、東は宝塚歌劇のファンと腐女子文化を比較して、女性ファン同士の活動にこそ強い意味があるのだと論じている。宝塚歌劇こそは日本にしかないものの、インターネットが普及したお陰で海外でもファンが増加するいっぽうで、その独自性からみても優れた比較対象である。

海外では、オーストラリアのマーク・マックリーランド (Mark McLelland) や台湾の周典芳の他、多くの学者が BL と海外の類似のジャンルについて長年に渡る分析や論文を発表しているが、海外における BL 研究は日本ではあまり知られていない。海外の学者が日本の文献を引用することは増えつつあるが、その逆は未だに稀である。日本の研究者が、BL や腐女子について英語の論文を発表し、海外と日本の橋渡しの役割を果たすこともできるはずだが、ここに腐女子研究の壁があると思われる。

国内の多くの学者は、未だに BL 漫画と BL ジャンル全体を日本国内限定の現象としてしか認識していない。1998 年の中島梓の『タナトスの子供たち』、2005 年の水間碧『隠喩としての少年愛』、同じく 2005 年、上記の小谷真理の SF エッセイ集には海外にも類似のジャンルがあるということに言及されてはいるが、BL 漫画が海外にどれほどの反響をもたらしているかについて研究する日本の学者は少ないというのが現状である。

日本の研究者が、海外の腐女子文化についての研究に興味がないことを裏付けるもののひとつとして 2010 年発表の『Boys' Love Manga』という研究書が挙げられる。この論集はコミックマーケットを創設した人として海外でも知られている米澤嘉博氏に捧げられているが、掲載論文のすべてが海外の学者によって書かれている。海外の BL 漫画の人気、腐女子の性志向の曖昧さなどを探る非常に興味深い論文が 14 本も掲載されているが、日本の執筆者は一人もいない。この研究書に日本の学者の視点もあれば、もっとバランスの良いものができたのではないと思われる。執筆者は全員大学に所属し、普段から学術分野で活躍しているというプロではなく、在野の研究者である。BL 漫画原作者のヤミラ・アブラハムは表現規制の厳しいインドネシアの BL アーティストと共同作業をする際について非常に興味深い考察をしたり、アメリカでセミプロの BL 作家であるタリア・ファイヤーダンサー (Talya Firedancer) がシンガポールのタン・ビー・キーの論文に何回か引用されたりなど、論集全体にわたってこういったクロスカルチュラルな内容となっている。この論集に欠けているのは、例えば海外での BL ファンコミュニティで活躍する日本人同人アーティストからの視点である。

日本で国内の学者達による BL 漫画についての重要な議論がされる中で、海外の BL 漫画の広がりを「論外」、もしくは「関係ない」とする態

度は非常に残念である。まさしく小田切博が2009年の第1回国際技術会議「世界のコミックスとコミックスの世界」で指摘したように、日本の漫画研究言説はガラパゴス島にいる状況と同じで、トランスナショナル、比較文化的なBL漫画研究はまだ不十分であると言える。

3. これからのBL漫画研究の可能性

BL漫画や腐女子文化研究を日本限定の現象として扱うことは、学者として認められないという理由はいくつかある。

まず、BL漫画と腐女子文化は「日本発」の現象であっても、海外にも同時に発達してきた類似の現象があるからである。「日本にしかない現象」「日本独特な現象」等という制約は、日本人論の主張を思い起こさせる非学術的な観点である。社会的、文化的背景が違うため差異はあるが、類似点があまりに多く、また、秘密組織のような女性ファンのコミュニティの類似点もあまりに多くて、無視できない。これを無視するのは「もったいない」というだけでなく、学者として無責任といえる。類似点を発見すれば、そこを調べるのが学者として当たり前のものであり、類似点を見出すことで差異がはっきりとみえてくるのである。

その類似点の一つとして挙げられるのは、BL漫画と海外の「類似ジャンル」の両方が男性のホモソーシャルな関係をホモセクシュアルに書き換えるという点である。パロディー的ともいえる腐女子の「方法」というより、「腐女子の生き方」とも言える。誰でも出来そうで、一見「たいしたこと」ではないようにみえるがこのような行為は男同士の絆によって権力を得る家父長制を「侮辱」するため、「危険」であるとカミユ・バコン＝スミス (Camille Bacon-Smith) が主張している (1992: 290)。

家父長制をささえる男性間のホモソーシャルな関係を覆すジャンルの存在、そしてこのジャンルが世界中の女性に熱狂的に支持されていることは、ジェンダー研究、メディア論、そして社会学の分野において重要な視点になりえる。男性中心社会における権力関係の基礎となっている「男同士の絆」(イヴ・K. セジウィック) を、いとも簡単に書き換える日本の腐女子文化とグローバルな腐女子文化を比較することによって、学術的に貢献できると思われる。

二つ目として、日本発のBL漫画のクリエイター、そして同じ腐女子文

化のメンバーであるヤオイ同人誌漫画の作家と消費者は、作品において明らかに海外の影響を受けているという点である。1970年代において少年愛を描いていた漫画家の多くは、設定をヨーロッパやエジプトにしたり、観光ツアーがまだなかった時代に個人で現地に向かい取材しにいたりし、それは当時の洋画の影響（『ベニスに死す』等）であったと熱く語る腐女子も多い。現代の腐女子はテレビやパソコンを通じて海外の作品を鑑賞し、海外のファンに直接同人誌を売ったりするなど積極的に交流をもち、『スーパーナチュラル』や『アヴェンジャーズ』という海外映画をネタとして使ったり、「海外ドラマ限定」の同人誌即売会を開催するなど、日本の腐女子文化の国際化は進んでいる。にもかかわらず、日本の腐女子文化の研究者が海外の研究を視野に入れようとしないのは不自然ともいえ、非生産的である。BL漫画と腐女子文化をグローバルな現象としてみようとする態度、頑固なリージョナリズムは日本で行われる研究にも害を及ぼすと思われる。グローバル化によってBL漫画は大変な勢いで海外に「漏れて」しまったが、その事実を無視しつづけると、別の意味で日本国内の研究に「漏れ」(lacuna)が生じるだろう。

こういった漏れを解消する動きは、幸いにも国内ですでに起きている。2010年に大分大学で行われた国際BLシンポジウムは、特に素晴らしい試みであった。その数ヶ月前には、同様のシンポジウム「やおい／BL(研究)の今を熱く語る」が大阪でも開催されたが、大分ほど国際的ではなかった。その後、第2回、第3回のオーディエンスをみると、外に開かれてきているという印象が見受けられる。日本国内の限定的な評論と、グローバルな現象としてBLを研究する学者との間にある壁を乗り越えようとする動きは、ここ数年確かに始まってきている。

最後に、社会学者として、そしてジェンダー・スタディーズ、クイア・スタディーズ、メディア論で活動する我々には、社会に対して、そしてコミュニティの一員としての責任がある。学者は、常に視野を広く持たなくてはならない。予想しなかった研究結果もしっかりと認識し、論じることが必要である。しかし、学者同士で意見を交換したり、論じたりするよりも大事なことは、研究の成果を当事者と社会全般とで共有することではないだろうか。我々学者の多くは、この不況の時代においても比較的経済的に恵まれており、政府から補助金が出ているので研究ができる研究者も

いる。だからこそ、自分たちの研究をできるだけ共有する「義務」がある。「ややこしくなるから関係ない」「外国のことは内とは違うから、知らない」等の、こういったメンタリティーこそが真の社会悪を生み、多くの人が歪んだ情報にしかアクセスできない原因にもなりうる。最近の人文科学系の学者は成果を出さないという批判は、特にカルチュラル・スタディーズに向けられているが、残念ながら、この批判が妥当であると思われることは確かにある。「研究？自分の趣味をやっているだけだろう」と言われられないように、研究する対象をグローバルな文脈で把握するべきであろう。

グローバルな文脈を把握することで、BL 漫画研究から何を得られるだろうか。日本国内の腐女子について得られた洞察が海外の腐女子にも当てはまるのかどうかを調べることで、日本国内の腐女子についても新しい見方が得られるはずである。

例えば今、国内の腐女子のコミュニティで心配されていることに、前述した「東京都条例」がある。この条例は漫画作品中の性描写を規制しようとする条例であるが、腐女子の多くは、BL 漫画によって、「まだ読んではいけない」年齢の時に性描写を含む漫画を読むことで、身体で直接経験する必要もなく様々な性的関係についての知識を得てきた。BL 作品は勿論「教科書」ではなく、エンターテインメントであるが、BL を読むことで快楽を得るだけでなく、勉強になることも多い。こういった「非公式な教育、とりわけ性に関する教育」は家父長制における権力者にとって不可視でコントロールしにくく、都合が悪いものである。今後の日本人女子が BL のような、女性作家が女性読者向けに発信する非公式な教育が受けられなくなるということが問題視されている。近親相姦等の描写が規制の対象となるが、フィクションのお陰で、「こういうことがあるんだ」と初めて知り、こういう目に合わないようにと気をつける読者もいるであろう。すでにこういった目にあっている読者は、「自分だけじゃない」「私一人じゃない」「これは間違っている」とやっと気がつくこともあるだろう。性犯罪の被害者にとっては、BL にはホラー・映画と似たような機能があると指摘もできる。イザベル・C. ピネド (Isabel C. Pinedo) が指摘するように、「ホラー映画は恐怖を経験する練習でもあるが、同時にその恐怖を乗り越える練習にもなる。つまり、「コントロールの損失」を「コントロールさ

れた損失」に代替すること」⁷ができるのである。男性中心主義の社会において、いつ襲われるか、性暴行にあうのか制御できない。しかし、BLにおいて、架空・仮説的なシナリオが複数提供され、そしてこのシナリオこそが「コントロールされた損失」となっている。性描写に対しての表現規制は、あらゆる性行為の知識は若者にとって「危険」だという権力者の不条理な価値観を著者・読者両方に押し付ける。そして、ここで注目すべきことは、こういった検閲による課題と直面するのは、けっして日本の腐女子だけではないということである。

先述したように、アメリカで英語によるBLの原作を手がけるアブラハムは、インドネシアの腐女子についての論文をまとめた。経済的な不平等もあるため、アメリカのBL漫画出版社数は、作画をインドネシアのアーティストに委託している。しかし、インドネシアでは大人でも法律上、性嗜好を問わず、性描写を描くことは一切禁じられ、賞罰の対象になっている。よって、インドネシア人のBL作家は非常に危うい環境でBL漫画を描き、ネット通信を介して輸出し、収入を得ているが、決して実名を使わず、「裏組織」で活動を行っている。このように海外で検閲に直面する腐女子の状況を日本国内で検閲と戦う腐女子の状況と比べることによって、国際的な視点で女性向けメディアにおける性描写と女性の市民権を脅かす保守的政治運動に対して、もっと脈格のある抵抗ができるようになることも考えられる。上記はほんの一例に過ぎないが、今後も日本におけるBL漫画と腐女子文化研究の内向的にかつ閉鎖的な時代に、開国を促していきたいと思う。

7 “Much as the horror film is an exercise in terror, it is simultaneously and exercise in mastery, in which controlled loss substitutes for loss of control.” (1997: 41) (筆者訳)

参考文献

- Aoyama Tomoko “Male Homosexuality as Treated by Japanese Women Writers”. *The Japanese Trajectory: Modernization and Beyond*, Gavan McCormack and Yoshio Sugimoto (eds.), Cambridge: Cambridge University Press, 1988, pp. 186-204
- 東園子 「私のための物語」—やおい再考『ユリイカー特集 BL オン・ザ・ラン!』2012年12月、Vol. 44(15) 172-177 頁
- 『女性のホモソーシャルな親密性をめぐる文化社会学的考察—「宝塚」と「やおい」のメディア論的分析を通して』博士論文、2009年度大阪大学大学院人間科学研究科提出
- Abraham, Yamila “Boys’ Love Thrives in Creative Indonesia.” *Boys’ Love Manga – Essays on the Sexual Ambiguity and Cross-Cultural Fandom of the Genre*. Antonia Levi, Mark McHarry, and Dru Pagliassotti (eds.), McFarland & Cie Inc. Publishers, Jefferson, North Carolina, 2010, pp. 44-55.
- 石田美紀『密やかな教育—くやおい・ボーイズラブ>前史』洛北出版、2008
- Ogi, Fusami (大城房美) “Gender insubordination in Japanese comics (manga) for girls”. *Illustrating Asia: Comics, Humor Magazines, and Picture Books*, Lent, John A. (Ed.), Honolulu: University of Hawai’i Press, 2001. pp. 171-186.
- 周典芳 「台湾におけるヤオイ読者の男性同性愛に対する意識」『情報コミュニケーション学研究 第8・9合併号』(2010年3月) 明治大学情報コミュニケーション学研究所、53-66 頁
- 「台湾におけるヤオイ現象—読者インタビューから見出したヤオイの理由」『日本ジェンダー研究 第12号』、2009年、41-55 頁
- 杉浦由美子 『腐女子化する世界—東池袋のオタク女子たち』中公新書、2006a
- 『オタク女子研究—腐女子思想体系』、2006b
- Suzuki, Kazuko (鈴木和子) “Pornography or therapy? Japanese girls creating the yaoi phenomenon”. *Millennium Girls: Today’s Girls Around the World*, Sherrie I. Inness (Ed.). Lanham, Md.: Rowman and Littlefield, 1998, pp. 243-267.
- 竹宮恵子 2011 「基調報告：『風と木の歌はアウト!』—アイデンティティを守るために」『第2回ポピュラーカルチャーシンポジウム報告書—ポピュラーカルチャー研究—排除されるポピュラーカルチャー—丁寧に語る「東京都青少年の健全な育成に関する条例」』 Vol. 5 No. 1 2011(11)、京都精華大学全学研究センター、8-18 頁

- セジウィック、イヴ・K. 『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』
上原草笛、亀沢美由紀訳、名古屋大学出版界、1985/2001/2年
- Tan, Bee Kee “Rewriting Gender and Sexuality in English-Language Yaoi Fanfiction”.
*Boys’ Love Manga — Essays on the Sexual Ambiguity and Cross-Cultural Fandom
of the Genre*. Antonia Levi, Mark McHarry, and Dru Pagliassotti (eds.), McFarland &
Cie Inc. Publishers, Jefferson, North Carolina 2010, pp. 126-156.
- Nagaike Kazumi “Elegant Caucasians, Amorous Arabs, and Invisible Others: Signs and
Images of Foreigners in Japanese BL Manga.” *Intersections, Gender and Sexuality in
Asia and the Pacific* (April 2009, no. 20) n.p. [http://intersections.anu.edu.au/issue20/
nagaike.htm](http://intersections.anu.edu.au/issue20/nagaike.htm)
- 中島梓 『タナトスの子供たち — 過剰適応の生態学』 ちくま文庫、1998年
—— 『コミュニケーション不全症候群』 ちくま文庫、1991年
—— 『美少年学入門』 集英社文庫、1987年
- 西村マリ 『アニパロとヤオイ』 太田出版、2002年
- Bacon-Smith, Camille. *Enterprising Women — Television Fandom and the Creation of
Popular Myth*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 1992.
- Pinedo, Isabel Cristina. *Recreational Terror — Women and the Pleasures of Horror Film
Viewing*. State University of New York Press, New York, 1997.
- 藤本由香里 『私の居場所はどこにある？ — 少女マンガが映す心のかたち』 朝日
文庫、1998年
- ベルント、ジャクリーヌ 『マンガの国日本 日本の大衆文化・視覚文化の可能性』
佐藤和夫／水野邦彦訳、花伝社、1994年
- Hellekson, Karen, and Busse, Kristina (eds.) *Fan Fiction and Fan Communities in the
Age of the Internet*. McFarland & Cie, Inc. Jefferson, North Carolina, 2010.
- 堀あきこ 『欲望のコード—マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店、
2009年
- McLelland, Marc. “Why Are Japanese Girls’ Comics Full of Boys Bonking?” *Refractory:
A Journal of Entertainment Media*, 10., 2006/2007, n.p.
[http://refractory.unimelb.edu.au/2006/12/04/why-are-japanese-girls%E2%80%99-
comics-full-of-boys-bonking1-mark-mclelland/](http://refractory.unimelb.edu.au/2006/12/04/why-are-japanese-girls%E2%80%99-comics-full-of-boys-bonking1-mark-mclelland/) (Last access 12/02/2013)
- “Local Meanings in Global Space: A Case Study of Women’s ‘Boy Love’ Web Sites
in Japanese & English”. *Mots Pluriels*, October 2001. n.p. <http://motspluriels.arts>.

uwa.edu.au/MP1901mcl.html (Last access 12/02/2013)URL?

溝口晶子「反映／投影論から生産的フォーラムとしてのジャンルヘーヤオイ考察からの提言」。ジャクリーヌ・ベルント篇『グローバルマンガ研究1—世界のコミックスとコミックスの世界』、京都精華大学全学研究センター発行、2010年、141-163頁

水間碧『隠喩としての少年愛—女性の少年嗜好という現象』創元社、2005年

守如子『女性はポルノを読む』青弓社、2010年

Radway, Janice A. *Reading the Romance, Women, Patriarchy, and Popular Literature*. University of North Carolina, 1991.

Levi, Antonia, Mark McHarry and Dru Pagliassotti (eds.) *Boys' Love Manga: Essays on the Sexual Ambiguity and Cross-Cultural Fandom of the Genre*. McFarland & Cie, Inc. Jefferson, North Carolina, 2010.

Lentz, Kirsten Marthe. "The Popular Pleasure of Female Revenge (or Rage Bursting in a Blaze of Gunfire)." *Cultural Studies* 7 (1993) pp. 374-405.